

## 【2004年度調査報告】

### 五島調査報告

(1)調査日程:2005年1月24日(月)～1月27日(木)

(2)参加者:蔵持重裕(立教大学文学部教授)、照沼麻衣子、藤木正史(以上、立教大学大学院)

(3)調査目的

長崎県長崎市及び五島列島北部(南松浦郡新上五島町・北松浦郡小値賀町)の捕鯨関連史料の現況把握と史跡踏査

(4)調査報告

1月24日 長崎市

蔵持・照沼は、8:25 羽田空港発、10:20 長崎空港着。バスにて長崎市内へ移動。まず、長崎県水産課を訪ね、長崎くんち等の情報収集を行い、書籍を購入する。その後、グラバー邸において展示パネル『日本西部及南部魚類図譜』、通称『グラバー漁譜』中に鯨の図があることを知る。これは、倉場富三郎が編纂したもので、全三十四巻ありその第三十三集に「くじら」の項目がたてられている。続いて、くんち資料館を見学した。夜、藤木合流。

1月25日 新上五島町(青方・有川・丸尾・奈摩)

この日は、長崎より五島に渡るために長崎市電を乗り継ぎ、まず長崎港へ。五島汽船フェリーで8:00 長崎港発、9:30 中通島鯛ノ浦港着。レンタカーを借りて島内をまわることにした。

新上五島町は、平成16(2004)年8月に、上五島町・有川町・新魚目町・若松町・奈良尾町の5町が合併して誕生した。役場は、青方の旧上五島町役場が利用されている。

まず、役場において青方氏・青方文書に関する情報を収集した。青方氏に詳しい方として郷土史家谷村正行氏をご紹介頂くが、不在。ここでは新上五島町管轄下の旧町村の町勢要覧等を入手した。青方氏は、中世においては青方郷を拠点とした在地領主として、また近世には五島藩の有力家臣として活躍し、青方文書が伝存している。永和3(1377)年3月17日青方重議状案には、「かつおあみ(鰹網)」・「しひあみ(鮪網)」とともに、「ゆるかあみ」が子孫への譲渡権利としてあげられており、これは入鹿(海豚)網と思われる。この時期に、イルカを網で捕獲していたことがうかがえる。

つづいて有川へ向かった。まず法務局においては、青方氏居館跡・城跡周辺の地籍図を調査し、コピーを入手した。昼食には五島うどんを食す。その後、徒歩で有川港周辺の捕鯨関連史跡をめぐる。海童神社はその参道の入口に、両脇より2本のナガス鯨の顎骨がそびえている。鯨見山の頂きには、山見小屋が復元されており、眼下には有川の町並みと有川湾から中通島北端の津和崎へと続く海岸線、海に向かって前面には伝統捕鯨・近代捕鯨の基地であった横浦をのぞむ事が出来る。なお、山頂から一段下りたところに鯨供養碑(正徳2(1712)年、江口正利が建立)があるが、今回

は未見。

その後、有川湾をまわりこんで北にむかい、丸尾（魚目浦）にいたる。現在、丸尾港は小さな漁港であるが、その一面にコンクリート製の小屋に保護された鯨供養碑〈深沢儀太夫が建立、儀太夫の墓も同所にある〉がある。最初、場所がわからず地元の方に尋ねたが、あまり認知されていないのかはっきりとはわからないようだった。魚目浦は、延宝6(1678)年に肥前国大村の深沢儀太夫と契約し、捕鯨業を開始したとされている。

丸尾からさらに北上し、似首から奈摩へいった。奈摩は、青方氏が青方へ移る前に拠点とした場所とされている。まずは館跡とされる福寿庵に向かった。もとは奈摩松山の丘の上にあったが、明治33(1900)年頃に現在地に移されたものという。そこから徒歩で、殿様墓と呼ばれる石塔群に向かった。ここは元墓地であり、地蔵堂が存在したが明治6(1873)年に廃寺となっている。本尊の地蔵菩薩は福寿庵に合祀されている。五輪塔や自然石板碑などが集積されており、同じ敷地内には軍人墓などもある。中央にある社で覆われた五輪塔は平成3(1992)年に町の有形文化財に指定されている。その左隣にあるのが、青方氏の祖先である藤原道高の五輪塔とされており、右隣には自然石板碑が2基ある。むかって左側の大きな板碑は、豊臣秀吉による文禄の役の戦没者を供養するものとされ、もと福寿庵にあったが廃寺にさいして現在地に移されたものである。右側の小さい板碑は鯨供養碑とされる。江戸時代に奈摩の永田富太郎が建立したもので、もとは松山の阿弥陀堂（福寿庵の前身）の側にあったが、丘が崩れた時に現在地に移されたものである。

奈摩の鯨組は、富江藩の政策によりその大半は富江の津多良島に移住させられている。また、青方の祝言島北側の唐崎鼻には、永田富太郎の名が小値賀の浜田太次郎の名とともにきざまれた恵比寿神（唐崎様とよばれる）の石祠がある。享保元(1716)年のものである。

奈摩から南下して青方にいたる。ここでは、青方氏関連の史跡をまわることにした。まずは、その居館跡へ向かう。居館跡の石垣は、下方は近代に入って積まれたと思われるが、上方はもともと積まれていた石垣が残っているようだった。上にのぼってみると、現在は畑地になっている。一段、方形にくぼんだ一画があり、住居が建っている。青方文書中に残された青方氏居館絵図に描かれた枡形を想起させる。続いて背後にある標高 61m の殿山に登った。丘陵全体に城跡遺構が見られ、石垣・空堀と思われる遺構が確認できた。山頂には小さな石祠が祀られている。山頂や中腹からは、木々がなければ眼下に居館跡と青方郷の町並みが一望できると思われた。

また事前に入手した小字図によれば、字名から居館前は埋立地と思われ、従来の青方湾は現在よりももっと奥へと入り込んでいたと思われる。これも絵図の描写と一致する。

再び有川へと戻って、鯨賓館ミュージアムを見学した。見学にあたっては、学芸員の内藤かおり氏にご案内頂いた。鯨賓館ミュージアムは、港湾ターミナルなどの施設も含んだ複合施設となっている。

入口をはいって右手の展示は古代の捕鯨がテーマになっており、町内立石遺跡から出土した鯨底などが展示されている。鯨底は、土器製作時に形を整える回転台として使用された鯨の背骨の押型が残った土器である。

続いてその先は江戸時代の有川湾で行われた捕鯨に関する展示になっている。有川古式捕鯨の歴

史として有川鯨組を組織した江口家と江口甚右衛門正利についての紹介があり、正利を案内人とした鯨組の様子を紹介するアニメーションが興味深かった。このアニメーションでは、『肥州五嶋浦鯨突之絵図』（千葉県勝浦市黒汐資料館蔵）を利用し絵図をデジタル化することによって、1枚の絵図に描かれた捕鯨業の様子を順をおって解説している。絵図は、上から下にむかって鯨の群れの発見から浜での解体までが描かれているが、デジタル処理されることによって絵図中の鯨や人に動きをつけることができ、大変わかりやすいものとなっている。

アニメーション向かいのガラスケースの中には、有川魚目海墾相論のおりに与えられた江戸幕府評定所裁許状（元禄3(1690)年）が展示されている。この時の海墾相論は、寛文元(1661)年～3(1663)年に行われた、五島藩の福江・富江分藩に端を発する。隣郷である有川と魚目がそれぞれ、福江領と富江領に編入された際に海上の境界を具体的に取り決めなかった為に、有川湾における漁業権の権利争いが勃発したのである。有川名主江口正利は、両藩に訴えてきたが埒があかず、江戸公訴にふみきり、四度の江戸登りの結果、上記の裁許状によって有川湾内は入会漁場であることを認めさせた。展示の内容や解説から、現在でも有川における江口正利の功績は、おおいに顕彰されていると感じられた。

他に、近代捕鯨に関して東洋捕鯨株式会社についてのパネル展示などがあった。また、その社長であった原萬一郎が使用していた、すべて鯨のヒゲで作られた応接セットが展示され、当時の捕鯨業の隆盛を物語っている。萬一郎も有川の出身であり、五島捕鯨株式会社解散で失業にあえいでいた郷土の人々を率先して東洋捕鯨株式会社に雇い入れている。

つづいて江口家文書を閲覧させて頂いた。整理の過程においてか、江口家文書と江口文書の2群にわかれており、いまだに広く紹介はされていない。総数は、頂いた資料によれば600点をこえるものと思われる。閉館時間がせまっていた為に多くの史料を見ることはできなかったが、興味深かった史料は、先に記した有川魚目海墾相論にさいして有川の人々が勝訴を祈願して、村内約90箇所の社寺に奉納や、造営・修理を約束した帳面であった。江口家文書は現在整理途中であり、今後捕鯨業を含む在地の史料としての重要さは増すものと思われる。

また、内藤氏より近年、捕鯨関連史料として、専念寺に残されていた五島捕鯨株式会社の株券が発見されたことをご教示頂いた。この中には、生月捕鯨株式会社の株券も含まれているということで、近代捕鯨史料として貴重と考える。

夜は有川に宿泊し、内藤氏とともに鯨料理を食しながら、さらにお話を伺った。

1月26日 新上五島町（白魚・日島） 小値賀町

この日は、昼過ぎに小値賀島へ船で渡るために午前中は中通島南部の史跡を巡見することとした。

まず前日に鯨見山から見た横浦にむかった。伝統捕鯨・近代捕鯨の基地として元禄4(1691)年に開設されたと推定されている。明治16(1883)年まで基地として使用されていた。その後も五島捕鯨株式会社の基地として明治44(1911)年まで継続使用されていたそうだが、現在は当時の建物等は残っていない。しかし、防波堤の基礎部分の積み石や港内に石垣の一部が残存しており、伝統捕

鯨当時の遺物のように思われる。

次に、青方氏支族白魚氏の拠点であった白魚にむかい、中通島を南下した。中通島の西海岸ほぼ中央に位置し、深い入り江がある。旧若松町が建てた案内板によれば、当時は白魚千軒と呼ばれ繁栄したとされる。入り江の奥には千人塚と呼ばれる五輪塔・板碑などが集積された一角があり、ふたたび案内板によれば、正平13(1358)年に青方氏家臣吉村氏に攻められた際に討ち死にした白魚氏家臣の墓であるとされている。千人塚の左手、入り江の最深部には、低い草木が覆い茂る平坦地があり、おそらくは白魚氏の居館跡と考えられた。

つづいて、中通島と若松島を結ぶ若松大橋を渡り、若松島北端にある日島へ向かった。途中、何度か迷いながらついた日島曲古墳群は、有福島から日島に架けられた橋をわたったすぐの両側に広がっている。ここは中世以来の墓石群であり、小さな曲崎を覆うように五輪塔などが立ち並ぶ。海に向かってのびる砂州には江戸期以降のものが多いらしく、たいがい倒れていたが土器等が散乱している。道をはさんでその反対側には、規模も大きく立派な石塔群が立ち並んでおり圧倒される。

有川港 13:52 発の九州商船のフェリーに乗る為、昼過ぎに有川へ戻り昼食は前日とおなじく五島うどんを食した。内藤氏に昨夜教えていただいたお店にいったが、前日の地獄炊きという食べかたとは違い、様々な具がのっていたがまた趣が違い美味しかった。やはり、飛び魚の焼干しからとったあごだしがインパクトを与えている。

小値賀まではおよそ30分ほどの船旅だが、波が高くはねるように船は進んでいった。小値賀港につくとまずは、宿所である小西旅館に荷物をおき、小値賀歴史民俗資料館へと向かった。宿所や資料館のある笛吹郷は、小値賀町の中心であり役場等の施設が集まっている。

資料館では、学芸員の塚原博氏、職員の魚屋優子氏にむかえていただき、魚屋氏の案内で解説を頂きながら見学した。資料館の建物は、小値賀島を本拠に鯨組を組織した小田家の旧宅である。入口を入ると右手1階が小値賀島の歴史を紹介した出土資料などが並ぶ展示室、2階が資料整理室となっている。左手は小田家の母屋をそのまま利用した小田家と捕鯨業などに関する資料が展示されている。こちらには鯨位牌〈正徳4(1714)年、小田伝次兵衛正利〉や、捕鯨絵馬〈小倉組〉が展示されており、捕鯨絵馬は天保9(1838)年に奉納されたものである。小倉組に関する資料は、この絵馬しか残っていないが、摩滅が激しい。笛吹浦を描いたものとされている。

次に、資料整理室において小田家文書を閲覧させて頂いた。小田家文書は、館蔵のほかに福岡市立図書館に収蔵されているものがある。館蔵史料は、もとから地元のにこっていた資料と、立正大学教授北原進氏が古書店から購入した北原文書とからなる。北原文書は現在、資料館に寄贈されている。福岡市立図書館に収蔵されているものは、福岡在住の高岡氏が古書店から購入し図書館に寄贈したもので、高岡文庫と呼ばれている。資料館では、高岡文庫も含めて目録化されており、順次解読作業が進められている。

館蔵の捕鯨関連資料は小田家文書中に176点、役場行政文書8点、大坂屋文書20点の、計204点があり、高岡文庫中にも218点の捕鯨関連資料がある。また、寄託資料である隣島宇久島の久保泊家文書にも79点の捕鯨関連資料がある。小田家文書の総数は5000点にのぼるとされ、捕鯨関連資料以外にも、小田家が行った新田開発・酒造業などの事業に関する資料も多く、内容も様々である。時

間の関係上、十数点の資料しかみることができなかつたが、捕鯨関連の目録をコピーさせて頂いたので今回の調査の参考になると考える。他に『重利一世年代記』（小田重利の自叙伝）など、小田家文書を分析する上で参考となる関連資料等も閲覧させて頂いた。捕鯨業とその他の事業との関連性に注意しつつ検討することが必要と感じた。

夜は、塚原氏・内藤氏とともに食事をしながらさらにお話を伺った。

1月27日 小値賀町

この日は魚屋氏のご案内で、レンタカーにて島内の捕鯨関連史跡を中心に見学した。

まず向かったのは、笛吹郷の沖にうかぶ黒島である。現在は、橋で本島と結ばれている。もともとは本島で亡くなった人々の埋葬地であるとされている。捕鯨関連施設としては山見小屋があったところで、島の中央部に石垣で作られた見晴台がある。そこからの眺めは北は笛吹郷を一望でき、南に目を転じれば五島列島全体が見渡せる。北端の宇久・小値賀島と南端の福江島が平坦な地形であるのに比べ、その間の中通島などの島嶼は山が海岸線までせまる急峻な地形となっている。その地勢状の違いが一見できた。

次に本島の西に位置する斑島へ向かった。斑島も本島と橋でつながっている。島の最高地点にある斑島園地からは、やはり五島列島が見渡せるが、眼下には鯨組の海難事故の碑があるという菟路木島が確認できる。しかし、碑の位置ははっきりとしない、ということだった。

笛吹に戻り、小田家の墓所へ向かった。歴代の小田家当主の墓石とともに鯨供養碑がある。これは小田重利が元禄8(1695)年に建立したもので、歴代の墓石と同規模であり、いかに殺生についての恐れ、または自然の恵に対する敬意が表されているかを思った。

中世において本島は中村と前川で東西にわかれており、その部分を埋め立てたのが建武新田である。これは近世の新田開発と区別する為に塚原氏が命名したものであり、中村側には膳所城跡がある。平戸松浦氏15代の源定（貞）の築城とも伝えられているが、立地としては海岸（埋め立てられる以前）につきだした形となっており、城跡を取り囲む空堀や井戸跡などが確認できる。建武新田も定の命によって埋め立てられたと伝えられ、牛渡という字名となっている。新田開発にさいして使役された牛に由来する、とされている。

つづいて前方側に向かった。前方には中世墳墓群が何箇所かあるというお話を伺ったが、そのうちの薩摩堂中世墳墓群は、平戸松浦氏の祖先とされる薩摩守に由来する地にある五輪塔群である。苔むした五輪塔がほぼ一列に並んでおり、小規模なものが多かった。次に向かった経崎山中世墳墓群は長寿寺の裏山にあり、その入口には小田重利が建立した妙典塔がある。こちらは板碑群であり、一番奥に石積みで囲った区画がある。その中央にはもとは立っていたと思われるひときわ大きな板碑が倒れていた。源定の墓であると伝えられており、埋立地をはさんで膳所城跡と向かい合う地であった。

笛吹へ戻る道すがら船瀬浜にある牛の塔を見学した。建武新田造成のさいに労働力として犠牲となった牛を供養するためにたてた碑であり、船瀬浜から海に突き出した堤防の突端にある。コンク

リート製の小屋の中に石碑が安置されており、碑銘には「大願主地頭肥前守定」と「建武元年九月」  
建立の旨がきざまれている。

資料館に戻った後、昼食をとってから飛行機までの自由時間を各自周辺の史跡をめぐることにした。まず、六社神社に向かった。小田伝兵衛の要請で壱岐から渡ってきた吉野氏が現在も神官をつとめている。神社と道をはさんだ向かいに門が鳥居となっている吉野家がある。小田氏も壱岐から小値賀に移住してきたとされており、神社の石鳥居は小田氏歴代の寄進である。笛吹を見渡せる高台には阿弥陀寺があり、万日堂は県の指定文化財になっている。五島列島最古の木造建築物であるが、小田重利が自家の私堂として正徳6(1716)年に建立した念仏堂がその前身である。全体を朱で装飾した鮮やかなお堂である。

小値賀空港 14:35 発のセスナ機は10人乗りであったが、五島列島や彼杵半島、生月、平戸などを眼下に見渡しながらか長崎空港に 15:10 に到着した。長崎空港 16:00 発の飛行機で 17:30 に羽田空港に着陸し、空港で解散となった。

最後に、調査にご協力頂いた諸氏・諸機関にお礼を申し上げる。とりわけ、新上五島町鯨賓館ミュージアム学芸員内藤かおり氏、小値賀町歴史民俗資料館学芸員塚原博氏ならびに職員魚屋優子氏には、準備段階から懇切なご教示を頂き、資料を提供して頂いた。また、現地においても史資料閲覧や史跡案内等大変お世話になった。重ねて感謝申し上げます。

五島調査関連受贈・購入書籍および資料（入手順）

『長崎くんち』、長崎インカラー、1991

『長崎くんちの栞』、長崎伝統芸能振興会、2000

『長崎県 鯨の郷土誌』、長崎市水産農林部水産課、2002

『有川町町制施行70周年記念2002◎町勢要覧』、有川町企画観光課、2002

『有川町町制施行70周年記念誌ありかわもよう』、有川町企画観光課、2002

『2001上五島町勢要覧』、上五島町企画政策課、2003 新上五島町役場

『町制施行45周年記念2001年町勢要覧わかまつ』、若松町企画産業課、2002

『若松町閉町記念誌』、若松町、2004、新上五島町役場

『町勢要覧しんうおのめ1996』、新魚目町、1996

『奈良尾町町制施行60周年記念誌』、奈良尾町、2002

青方氏居館・城郭周辺の地籍図6枚

『小値賀町古文書資料集成第一集 漂着した琉球・朝鮮船の記録（一）』、小値賀町歴史民俗資料館、1995

『小値賀町古文書資料集成第二集 漂着した琉球・朝鮮船の記録（二）』、小値賀町歴史民俗資料館、2002

長崎県地方史だより抜刷：魚屋優子「小値賀島の捕鯨 藤松～小田～大阪屋組の捕鯨活動」

小値賀歴史民俗資料館所蔵小田家文書目録の内：捕鯨関係項目のコピー①館蔵

小値賀歴史民俗資料館所蔵小田家文書目録の内：捕鯨関係項目のコピー②北原文書

小値賀歴史民俗資料館所蔵小田家文書目録の内：捕鯨関係項目のコピー③高岡文書

小値賀の捕鯨に関する遺跡及び資料所在地図ほか一式

[事前入手]

『上五島町の文化遺産をたずねて』、上五島町教育委員会、1994

新上五島町管轄下旧町（旧上五島町1枚、旧新魚目町2枚、旧有川町1枚）の小字図

関連地域のもっとも古い国土地理院発行地図（1/2万or1/2.5万）18枚

※ 本稿作成においては、上記の書籍・資料を参考にさせて頂いた。

（文責 藤木正史）